

母島列島主要属島におけるオナガミズナギドリ

Puffinus pacificus の繁殖地確認

川 口 大 朗 (東京都環境局・東京都専門委員)
向 哲 嗣 (東京都環境局・東京都専門委員)
勝 部 五 葉 (東京都環境局・東京都専門委員)
川 上 和 人 (森林総合研究所)

要 約

2011年から2013年にかけて、母島列島主要属島(向島・平島・姉島・妹島・姪島)においてオナガミズナギドリ(*Puffinus pacificus*)の営巣を確認した。戦後、本種の営巣記録がなかった平島(26°35'8" N、142°9'19" E)・向島(26°36'9" N、142°7'45" E)においては、2011年9月27日(平島)および2012年1月30日(向島)に営巣地を確認した。

I. はじめに

オナガミズナギドリ(*Puffinus pacificus*)は、太平洋・インド洋の熱帯および亜熱帯地域に分布し、これらの地域の島々で繁殖する海鳥である。日本では小笠原諸島のみで繁殖が確認されており、諸島内では聳島列島から硫黄列島まで広く分布している。母島列島においては、母島、姉島、妹島、姪島および周辺の小島において繁殖が確認されているが、主要な属島のうち向島および平島では、戦後の繁殖記録がない(Chiba *et al.*, 2007)。また、繁殖記録のある島においても、本種の繁殖規模や営巣形態に関しては明らかになっていない。小笠原諸島では、属島も含めた各地で外来動植物の駆除事業が行われており、今後在来の生態系が回復することなどにより、海鳥の繁殖分布が変化する可能性がある。このような事業の影響を評価するためには、海鳥の繁殖地の現況を把握する必要がある。

そこで筆者らは、母島の主要な属島である向島、平島、姉島、妹島、姪島において、オナガミズナギドリの営巣地を探索し、営巣状況を確認したので報告する。

II. 調査方法

各島を広範囲にわたって踏査して営巣地を探索し、確認した営巣地の位置を記録した。営巣地を確認した場合は、巣の数を記録した。調査が非繁殖期であった場合は、巣穴の入

口サイズ、脱落羽毛や死体などの痕跡によりオナガミズナギドリの巣であるかを判断した。調査が繁殖期であった場合は、営巣地の攪乱を行わないように配慮しながら、糞や羽毛などの痕跡から最近の利用が確認できる巣の数を記録した。オナガミズナギドリの繁殖は、地面に掘られた穴だけでなく、草下の地上、低木樹下の地上、岩の隙間などでも行われるため、各島の営巣形態の違いを記録した。

Ⅲ. 結果

母島列島主要属島の調査は、2011年から2013年にかけて行われ、向島は2012年1月30日および2012年12月14日、平島は2011年9月27日および2012年12月21日、姉島は2011年12月29日および2013年1月8日、妹島は2011年10月2日および2013年1月13日、姪島は2011年6月17日および2012年7月13日に営巣地を確認した。

向島では、島の南部の海食崖沿いのオガサワラススキが優占する草地および周辺の低木林において、営巣地を発見した(図1)。営巣形態は、地面に掘られた穴が多く、ほかに草下の地上および低木樹(タコノキ等)下の地上を利用したものも少数確認された(表1)。確認された巣の数は、約40巣だった。

平島では、東部の海食崖沿いのイネ科植物が優占する草地において、営巣地を発見した(図1)。営巣形態は、全て地面に掘られた穴を利用したものだった(表1)。確認された巣の数は約40巣で、営巣個体も確認した。また、島の南東部の海食崖沿いのオガサワラススキが優占する草地においても、約40巣を確認した。営巣形態は、地面に掘られた穴、草下の地上を利用したものであった。

姉島では、島の南部の海食崖沿いのイネ科植物が優占する草地および周辺の低木林において、営巣地を確認した(図1)。営巣形態は、地面に掘られた穴が多く、ほかに草下の地上および低木樹(タコノキ)下の地上を利用しているものも少数確認された(表1)。確認された巣の数は、約20巣だった。

妹島では、島の北東部の海食崖沿いのイネ科植物およびハマゴウの優占する草地におい

表1 母島列島属島におけるオナガミズナギドリの営巣数と営巣形態

島名(営巣数)	向島(約40)	平島(約80)	姉島(約20)	妹島(約40)	姪島(約60)
営巣形態	営巣形態の割合(%)				
地中	90	85	70	65	90
草下の地上	5	15	20	25	5
低木樹下の地上	5	0	10	10	5
岩の隙間	0	0	0	0	0
計	100	100	100	100	100

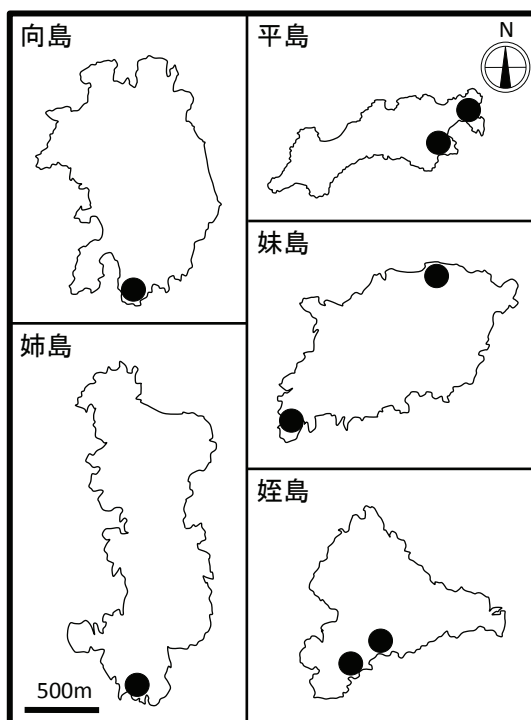


図1 母島主要属島におけるオナガミズナギドリ営巣地の位置

て、営巣地を確認した（図1）。営巣形態は、地面に掘られた穴および草下の地上を利用したものであった（表1）。確認された巣の数は、約10巣だった。また、島の南西部の海食崖沿いのイネ科植物が優占する草地および周辺の低木林においても、約30巣を確認した。営巣形態は、地面に掘られた穴が多く、ほかに草下の地上および低木樹（タコノキ）下の地上を利用しているものも少数確認された。

姪島では、島の南西部の海食崖沿いのイネ科植物が優占する草地および周辺の低木林において、営巣地が点在しているのを確認した（図1）。営巣形態は、地面に掘られた穴が多く、ほかに草下の地上および低木樹（タコノキ等）下の地上を利用しているものも少数確認された（表1）。確認された巣の数は約60巣で、営巣個体も確認している。

向島、平島の南東部、姉島、妹島の南西部の調査は非繁殖期に行ったため、営巣個体は確認できなかったが、巣穴の入口サイズが他島のオナガミズナギドリの巣と同等だったこと、周辺で羽毛が多数発見されたことから、本種の巣と考えられる。

IV. 考察

今回の調査により、母島列島主要属島の全島においてオナガミズナギドリの営巣地が確

認された。営巣地の植生は、イネ科植物（オガサワラススキ等）の優占する草地、またはタコノキ等の低木林が主であった。営巣形態は、地面に掘った穴を利用したものが大半で、ほかに草下の地上、低木樹下の地上を利用したものも確認された。

戦後、平島および向島においてオナガミズナギドリの営巣地が確認されなかったことは、自然環境調査の不足が原因であると考えられる。小笠原諸島では、無人島における海鳥の分布に関する知見は不十分で、最近でも新たな確認が報告されている（Chiba *et al.*, 2007; 川上ら、2008）。母島列島主要属島においても、島の全域を網羅する広範囲の調査は行われておらず、今回新たに営巣地が記録された場所も、これまでに詳細に調査が行われていなかった地域である。両島で見つかった巣の数は十分に多く、定着初期のものとは考えにくい。このため両営巣地は、調査不足から発見されていなかったものと考えられる。

また、母島列島では外来ネズミ類の生息が確認されており、オナガミズナギドリを含めた海鳥類は、その捕食により繁殖分布に影響を受けている可能性がある。母島列島主要属島では外来ネズミ類の駆除が計画されているが、駆除効果の評価を行うには、駆除実施前後の営巣数の変化を継続してモニタリングしていく必要がある。これらのことから、母島列島を含む小笠原諸島の属島における海鳥調査を積極的に行い、繁殖分布の知見を蓄積する必要がある。

謝辞

本研究に関わる調査は、小笠原諸島における自然環境の保護に関する東京都専門委員の業務、および林野庁関東森林管理局の希少野生動植物種オガサワラカワラヒワ等保護管理対策調査により行われた。

文 献

- Chiba H, Kawakami K, Suzuki H & Horikoshi K (2007) The Distribution of Seabirds in the Bonin Islands, Southern Japan. *Journal of Yamashina Institute for Ornithology* 39: 1-17.
- 川上和人、鈴木創、千葉勇人、堀越和夫（2008）南硫黄島の鳥類相．小笠原研究 33: 111-127.